

演題：歯肉にやさしい修復物（演者：遊亀裕一）

抄録：

いくら適合が良く、天然歯そっくりの色再現ができたとしても、装着された修復物の周囲粘膜に炎症が起きるようでは、歯肉にやさしい修復物とは言えません。歯肉にやさしい修復物を作るには、まずは歯周組織と修復物との適切な関係を歯科技工士も理解する必要があります。そして、患者さん個々の歯周状況を把握し、チェアサイドで施す炎症と力のコントロールに対する配慮も必要です。しかし、修復物製作時における作業模型は、歯周の状態を表面的な一部しか表していません。ましてや、歯牙を支えている歯槽骨や歯根膜の状態などは、作業模型からは全く把握することはできません。すなわち、作業模型から得られる限られた情報だけで歯肉にやさしい修復物の製作は難しいと言えます。

今回は、口腔内で長く歯周の健康を維持できる、歯肉にやさしい修復物はどのように作ると良いか、臨床例を提示しながらお話いたします。